



Title	5. 学外との協働・地域への発信 : AAS0映像プロジェクト
Author(s)	野入, 直美
Citation	GLOCOLブックレット. 2012, 8, p. 75-82
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/48314
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

Ⅱ 取り組み事例と 課題の共有

5. 学外との協働・地域への発信——AASO映像プロジェクト

野入直美 琉球大学法文学部准教授

野入直美 アメラジアンスクール理事の野入と申します。本業は琉球大学で社会学を教えております。アメラジアンスクールの「学外との協働・地域への発信——アメラジアンスクールの映像プロジェクト」というテーマで、きょうは話題提供をします。アメラジアンスクール全般のことでなくて、子どもたちが中心になって映像作品をつくって地域と交流・発信するプロジェクトについて、お話しをしたいと思います。

私たちのスクールは98年に母親たちが設立した民間の施設です。学齢期の子ども、幼稚園から中学校までいるのですが、小・中の子どもはスクールに通った日数を、在籍している公立学校の出席日数に読み替えるという「出席扱い」の措置によって、進級・卒業しています。ほとんどの子どもは県立高校を受験して、合格をしています。幼稚園から中学生までおよそ80名がいて、全日制の学校でやっています。英語と日本語によるダブルの教育をしていて、小学校課程では英語が8割ぐらい、中学校課程では半々ぐらいになります。どの学校でも、公立学校でもエスニック・スクールでも、ダブルの子どもがものすごく増えているのですけれども、結果としてダブ

野入直美

京都出身。

1994年から琉球大学で社会学を教える。

1998年からアメラジアンスクールのボランティアを始め、大学の授業「比較社会学」の現場学習をアメラジアンスクールで行う。

2004年からNPOアメラジアンスクール理事。

2011年発売のDVD「We are all STARS!! アメラジアンスクールの挑戦」では学習のしおりを監修した。



ルの子どもが増えている教育施設というのはたくさんありますが、お父さんがアメリカ人、お母さんがアジア女性というダブルの子どもを最初からメンバーシップとして設定しているのは、おそらくアメラジアンスクールだけではないかなと思います。

この映像プロジェクトは、トヨタ財団の地域社会プログラムというものに応募して採択されたものです。このプログラムは非常におもしろくて、「何かイベントをするからお金ください」ということで採択されません。自立を目指す、共生を目指す、人が育つ仕組みをつくる、継続性があるものという基準で審査していて、この趣旨にも共感して申請をしました。

この映像プロジェクトを始めることとなった経緯をお話します。アメラジアンスクールは、民間の施設なので、なんとか学校法人格を取れないかなということを考えていて、スクールの校長のセイヤー・みどりさんと私で東京シューレを見学に行きました。そうしましたら東京シューレで、ものすごく良いお客様

用DVDを5分ぐらい見せてくださって、よくわかるもので、私たちのスクールでも、訪問してくださる皆さんにコンパクトにスクールを紹介するものをつくりたいと思いました。それでそのためのボランティアを募集したり、寄附金を集めたりもしたいと考えました。

もう一つは、ときどきメディアが取り上げてくださって、ニュースで流れたりするのですが、すごく上手につくってくださる番組もあるのですが、一方で、戦闘機の映像に重ねたり、「戦闘機ゴー」とか、「基地の落とし子であるこの子たちの問題解決」というように、悲惨だと描かれることがあります。しかし「かわいそう」とは全然違うと思うことがあります。

ただ、実際のところ、日常的に、スクールの一步外に出ると、公園でもスーパーで買い物をしていても、皆がじーっと見るということがあります。「じろじろ見ないで、普通にわかってくれたらいいのにな」といったことも子どもも思っているわけです。

私たちのスクールですっとボランティアをしてきていた映像制作のフリーランスのカメラマンの翁長良さんという人がいて、この人に最初、セイヤーさんと私とで、スクールの紹介映像をつくってと仕事を依頼したのですが、「僕がつくるのは簡単ですけども、子ども自身がつくるのはどうですか。もちろん、僕がつくってしまうよりも、もしかしたら完成度的には落ちてしまうかもしれないけれども、つくるプロセスが大事と違いますか?」と言われ、「子どもが作ることによってアメラジ

アンというのは何、自分はだれということを考えるだろうし、お互い協力する協働の仕組みもつくれるのではないですか」と提案してくれました。「それだ」ということになったのですが、カメラマンの彼はこの提案をしたことを後で100回ぐらい深く後悔することになるのでした。メンバーはこのカメラマンの彼や、その仲間のプロの映像制作者がサポートして、クラス担任から琉球大学の学生もサポートして、スクールの職員もサポートして、中学生クラスの生徒がつくるということになりました。

この映像プロジェクトの目的は、まず子どもたちによる自己の再発見と表現をすることとしました。それから、アメラジアンスクールの紹介をする映像作品を教材にして、これで県内・県外を問わず、公立学校や地域の公民館などでも、使ってもらえるものになろうと考えました。公立学校で交流したり、地域社会に発信したりできるものになろうとしました。

スクール内では、まず課外の映像クラブということで発足したのですけれども、週1回のクラブ活動では時間と労力が足りないということがわかって、クラス全員で取り組むことになりました。総合学習ということで週1時間から始めたのですが、どんどん後にずれ込んでいって、次に週2時間ぐらいになり、最後は、11月は週4、5時間くらい費やし、土日は撮影に行くといったことになりました。2010年12月のアメラジアンスクールの学園祭で上映したのですが、ここではお客さんは保護者が多いのでみんなが手をたたいってくれる

のは当たり前ですが、この間、私の大学で私が持っている共通教育の100人講義で上映して、スクールの子にも大学に来てもらって自己紹介してもらい、交流授業をしました。

映像制作サポートの体制は、リーダーの翁長良さんというフリーランスのカメラマンですが、私の元教え子で、在学中からスクールでボランティアをしていて、プロのカメラマンになってからは、イベントでの撮影のボランティアをしてくれました。彼が仲間を集めてくれました。また、琉球大学の学生たちも協力してくれました。子どものグループに入って作業をサポートしたり、英語のできる学生は先生とカメラマンたちの通訳をしたり、それと同時に学生自身も何か子どもがつかれない作品をつくらうということになり、学生も、学生ボランティアとは何かを紹介するビデオを今つくっています。それから古い写真を使ったスライドショーで「写真で見る学校の12年」という内容の作品もつくり、何本かの作品をまとめて一つのDVDにしているところです。

作製している子どもは中学1年～3年で、複式学級で12人ぐらいです。映像づくりの経験はありません。割と小さいころからスクールに通っている子どもが多いです。公立学校でいじめに遭って私たちのスクールに来た子というのは、何人かはいますが、このなかではマイノリティです。

最初にくいつかの映像作品をみんなで鑑賞して、ディスカッションして、どのように撮影するのか、どのように編集するのかといったワークショップをした上で、ドラマ班とノンフィ

クション班が分かれました。子ども自身がシナリオをつくってコンペをやって、スタッフ、出演者を決めて、撮影して、編集しています。シナリオが決まったのが11月末で、最後は、どうやって完成させたのかよく分からない感じでした。その過程でさまざまなことが生じました。

コミュニケーションをめぐる問題では、学外のフリーランスのカメラマンやディレクターとどのように協働するかという問題がありました。特にこのプロジェクトのリーダーが学外のフリーランスカメラマンであったということ、学外と学内の違い、物事の進め方の違い、日本語だけしか話せないカメラマンと英語しか話せないクラス担任がどのように協働するかといった問題です。また、リーダーシップはどの大人がとり、生徒の指導責任はだれが負うのか、このプロジェクトはあまりにも時間を食い過ぎるという問題もありました。英語と日本語の2言語の教育を行っているので、時間をめぐるコンフリクトというものがアメリカンスクールにはつきものなのです。また、本当に子どものエンパワーメントになっているのかといった問いも出てきました。

このようにいろいろと大変だったのですが、もしすんなりとすばらしい作品ができてしまったらおそらく何も勉強にならなかったと思います。私自身も、ダブルであることというのは何かということとは本当によくわかるようになりました。アメリカンの子にとっては、本当に自明なのですね。当たり前過ぎて表現できないこともよく分かりました。私は関西出

身なので、私自身も友達に在日の人が出て、クラスのなかで在日であることを伏せていて、それを何とか向き合って友達と一緒にやってくといった、在日三世、四世の子どものマスター・ナラティブのようなものは、何となく自分のなかにもわかっているところがありました。しかしアメリカンの子にとっては、何か一つに収斂されるような、マイノリティのマスター・ナラティブというのはありません。より多様で、日常的であるという感じがして、興味深かったです。

ダブルであること、トランスナショナルであることと言ってもよいのですが、それは周りの大人一人ひとりに理解が及ばないと実践できないことです。そういう大人がサポートして、無理やりすごくナチュラルにダブルである子どもたちに「ドラマをつくらう」といったことを言うと、ドラマについての勘違いもあるのですけれども、何かすごく盛り上がりたければいけないといった思い込みがあって、いじめられ、暴力があり、それを克服し、ヒーローが出てくるといったシナリオがたくさん出てきます。むしろアメリカンについてのステレオタイプを子どもに教えているのではないかと深く反省したりもしました。教え方にしても、担任の先生はアメリカ文化を、プロジェクトリーダーは日本文化を前提にしているということがよく分かりました。

学外との協働・地域への発信の課題としては、一人ひとりが自明のものとして持っている学校文化、価値観というものをどれだけ相対化できるかということがあります。これは本

当に課題だと思いました。

それから、協働については、目的を明確にして共有できるかが課題です。これは、子どものエンパワーメントといったらエンパワーメントだけで、たった一つの目的であればもっとシンプルにできたと思うのですけれども、教材を作ってDVDにして販売しようという別の目的もあったので大変でした。目的はいろいろあってもよいのですが、これだけは共有しようといったものが持てるかどうか重要です。

それから、マイノリティの発信を地域のニーズとどう結びつけられるかということは、これは非常に大きな課題になると思います。後で少し琉球大学で実践したことについてもお話しします。

最後に、トランスナショナルではない大人には何ができるのでしょうか。一つは、アメリカンスクールでも卒業生が大学生になってボランティアに来てくれたり、学童を見てくれたりして、これがものすごくよいロールモデルになります。マイノリティ自身がリーダーになるということは、一つの打開策ではあるのですけれども、それではアメリカンではない私たちは、このダブルの子どもたちの気持ちは分からないのかとか、英語が話せないと協働はできないのかといったら、絶対にそのようなことはないのです。彼らは本当にナチュラルにダブルですが、周りの大人はそうではなく、かつ地域社会もそうではありません。「すばらしいエンパワーメント、ダブルの作品ができたね」で終わることなく、その先に広が

るようなことをどのように大人が、子どもを育てるのではなく、自分の課題としてつかんでいくことができるかということは、非常によく学びとることができました。

つい最近、私の大学の授業で、100人教室にアメリジアンスクールの中学生在が来てくれました。この映像を学生に見てもらって、それから質疑応答・ディスカッションをするという授業をしました。学生のほうからは、最初は、家ではどちらの言葉を話しているのとか、

どちらの言葉が出やすいのかといったあたりの方が出てきました。大体の子は「両方」といったことを言ったのですが、後になってから、「さっき両方とか言っていたけれども、例えば、ぼかっとなくられたら、どっちがパツと出てくる言葉?」という質問が出て、それに一人ずつそこにいた13人全員が答えたのですが、一番多かったのは「アガー」というものでした。「アガー」というのはウチナーグチ(沖縄語)なのですね。沖縄方言で「あいた」

活動の概要

1. 団体名

特定非営利活動法人アメリジアンスクール・イン・オキナワ

2. 活動地域

沖縄県宜野湾市

3. 活動概要

アメリジアンの子どもたちに対する「ダブルの教育」の提供。

4. 設立(活動開始)年

1998年

5. 活動の歴史

- 1997年 5人の母親が「アメリジアンの教育権を考える会」(以下「考える会」)を結成。行政に学齢期のアメリジアンの就学実態調査、公立インターナショナル・スクールの設立、公的援助等の教育権を要請する。
- 1998年 宜野湾市内の民間教育施設「アメリジアン・スクール・イン・オキナワ」(以下「スクール」)を開校させる。県所有の建物一室を借り、無認可のフリースクールとしてスタート。同年8月、宜野湾市大山の民家へ移転。学籍回復の運動をスタートする。
- 1999年 宜野湾市が市内の児童8人について、学籍回復を回答。県議会議長に学籍の回復を前提に「スクール」卒業の子どもの義務教育資格認定、公的な援助など6項目を要請する。県教育長が「考える会」から受けた公開質問状に回答、条件付きで民間施設でも義務教育を修了できる可能性を示唆する。認可の決定権は地元教育委員会に一任されることとなる。宜野湾市が「スクール」を県内初の民間教育施設と認め、公立校の「出席扱い」とする方針を決定。同年9月沖縄市、翌年3月浦添市も同様の方針を決定。
- 2001年 県と国が支援策を決定。国などの補助で宜野湾市志真志に建設する「市人材育成交流センター」への移転。県による日本語教師派遣が決まる。

というのが「アガー」です。ああ、この子ら、ウチナーグチなんだというようなものなんだん学生にも分かってきて、興味深かったです。そのやりとりも踏まえて、後で大学生がフィードバックペーパーに、さらにそのとき聞けなかった質問を書いて、それをもとにアメリカンスクールで授業をして、それに生徒が答えた内容を資料として添付します。

このQ&Aもおもしろいのですが、むしろ我々から琉球大学生に聞きたいこと、言いたいことというようなことなかで興味深いものがいくつかありました。「ハーフだからといって、自然に英語、日本語を覚えるわけではありません」、「琉大生は沖縄の方言を使いますか」、「どうしてバイリンガルやハーフの子に興味があるんですか」、「どうしてよく何人と聞くんですか」、「どうしてそれにこだわるんですか」という質問は、大学生にとっては非常に目を見開かれる問いになったみたいです。確かに今まで、「あっ、ハーフの人だな」と思う人に会ったら、まずこれを聞いていたなど。「どこの人ですか、何人ですかと聞いて、その次には英語しゃべれると聞いていたな」ということを学生が振り返り、それに対して、また学生が投げ返してという、往復のコミュニケーションが続いていきました。

今後、地域の公立中学校との交流授業が予定されていて、できればこのやりとりをブログなどでオンライン上にアップロードして、

そこに参加していない人にも見てもらい、「交流いかがですか」といった呼びかけもしていくというように広げていきたいと思います。

DVD教材のお問い合わせはアメリカンスクールまでお願いします。

DVD視聴はこちらから

<http://www.youtube.com/watch?v=ZMsVH-C0yWE>

ご注文はこちらへ

098-896-1966(アメリカンスクール)

資料

琉球大学「現代社会のしくみ」受講生の皆さんからの質問に対するアメラジアンスクール中学生クラスの生徒の回答+生徒からの質問/コメント

2011/1/20

Q1.「またドラマを作ることはありますか？」

- ・I think they will have a 2nd one because I think teachers will let us do it.
- ・I don't want to make a second drama.
- ・I don't really care for it.
- ・It depends if we feel like it. I don't feel like it.
- ・ない
- ・やりたくない
- ・わかりませんが、多分無いと思います。なぜなら、監督と主演の方達が卒業するからです。
- ・僕はやりたくないけど、見たいです。多分楽しかもしれない。
- ・私的には、やりたいです。
- ・今はまだ考え中です。もしかしたら、第三作のかもしれませんが。
- ・今の所はないけど。。他のドラマを作るうと考えている。
- ・自分的には、やりたいです。楽しかったから。次からは、ちゃんと皆と一緒にやりたい。
- ・やりたいけど、もう卒業だからです。

Q2.「撮影は予定通りにすみましたか？また、撮影するときに工夫したことなどはありましたか？」

- ・そこまで予定どおりには行っていなかったり、遅くなっていました。
- ・前々からこの日はこれを撮るというふうに決めてました。あとは、スタッフの人たちがとてもゆうしゅうということ

Q3.「ドラマのなかに出てくる同じ顔の人たちは私たち日本人のことなのかと思った」という意見があったので、生徒たちに聞いてみました。「同じ顔の人たちというのは、日本人のことですか？」

- ・Yes
- ・No
- ・No
- ・Maybe
- ・Yes
- ・ご想像にお任せ

Q4.「公立高校に行くと、今までの環境とは違う環境に属することになるとと思いますが、それによって自分たちに何らかの変化があると思いますか？」

- ・多分私にはないことでしょう。公立の学校に行っても、アメラジアンで過ごしたように過ごすと思います。
- ・私たちが今もっているこの英語と日本語、両方の言葉を使うことはあんまりないと思う(忘れる人もいる。)でも、私たちが何か、どんな存在かは変わらない。
- ・今の中3のみんなにちょっとかんげいすると思います。変わると思います。何もかもが。今までどおりとはちがいが、むずかしくなりそうです。

Q5. アメラジアンスクールでいじめはありますか？

- ・There may be some bullying or teasing but not a lot, and most of the time in a friendly way.
- ・I think there isn't because there is not a lot of fighting, and if there is bulling, I think it's just playing.
- ・Not really because we all get along.
- ・We have very little of that problem.
- ・Maybe a little at times, but I don't think it's that bad.
- ・いじめはないけど、ちょっと人をイジったりすることがあります。

- ・アメリカンスクールでははじめは珍しいです。みんなが仲良くて家族的な雰囲気です！
- ・そんないない。
- ・あります。
- ・はい。あります。でも、いじめは少ないですけど、低学年にあると思います。
- ・イジメはあると思います。自分も昔イジメにあった事がありました。
- ・イジメはあると思う。ていうかあった。今はどうか知らん。
- ・無い！あるわけがないじゃん。あったら退学になる(いじめた人が)
- ・今はないけど、おきるかも。イジメは必ず外見だけがげいいんじゃない。多分

Q6. 「米軍基地についてどう思うかなどについての意見交流もしたかった」という声があったので、生徒に聞いてみました。「米軍基地についてどう思いますか？」

- ・We need the base because we need American teachers.
- ・I think that the base is kind of necessary to our school. We have parties and play on some of the military establishments. So yes, I believe it is something we need, and the bases are great places.
- ・I think it's a mini America. They sale American food and clothes. It also lets the Americans learn and experience the culture and language.
- ・It is very handy because I can eat American food.
- ・I think we need it because you could have food from the base and you could have a flight free from Kadena or Futenma.
- ・あったほうがいいです。友達とか仕事のため。
- ・私は、いると思う。確かに飛行機とかうるさいけど、基地がなければ沖縄に攻撃した場合破壊されると思う。基地があったからこそ今の沖縄がある。
- ・基地はあったほうがいい。(軍事てきにも)
- ・自分は基地県外移設反対です。
- ・めんどくさい所。だってIDとか見せないといけなし。

琉大生に聞きたいこと、言いたいことなどがあれば書きましょう。

- ・We really enjoyed being with you guy! Thank you for the question and the comment at the end.
- ・琉大生のみなさん、 アメラジアンスクールの生とは大人になるとくせきをアメリカ人・日本人のどちらかを決めないといけなことを知っていましたか？とてもむずかしいDecisionです。It's matter of life.
- ・I hope they can make our school a better place!
- ・What nationality do you see our school in ? If you could volunteer here, would you?
- ・琉大では「いじめ」がありますか？
- ・ハーフだからといって自然に英語(日本語)を覚えるわけではありません。
- ・It was fun in ryu-dai and the food was good.

Q1. In Ryudai do you have bullies?

Q2. What kind of nation is Ryu-dai

- ・琉大生はおきなわのほうげんをつかいますか？

・What did you decide to go to university?

When did you decide what you want to become?

- ・どうしてバイリンガル/ハーフのことに興味があるんですか？
- ・どうしてよく何人って聞くんですか？どうしてそれにこだわるんですか？
- ・自分たちが作ったビデオを見てください、ありがとうございます。ぜひ学校に見学をしに来てください。
- ・Thank you for all the comments!
- ・アメラジアンスクールに通っている子はアメリカ人とアジア人だけじゃないのを知っていますか？
- ・みなさんはアメラジアンスクールのこと本当に知っているんですか？
- ・アメラジアンになりたいと思ったことありますか？
- ・ボランティアに来てくださいね。もしあなたがハーフだったらどうしますか？公立の学校に行くか、アメラジアンみたいな学校に行くか？国籍どこにしますか？